

# プロレタリア通信

第27号

1994年3月10日  
定価 100円

連絡先  
〒170-91  
東京都豊島郵便局  
私書箱59号

振替 東京 0-191397  
アジア政治経済研究所

発行「プロレタリア通信」編集委員会  
☆万国の労働者団結せよ！  
被抑圧民族の解放  
☆帝国主義打倒・プロレタリア独裁・社会主義  
☆スターリン主義打倒・国際非合法党の建設

## 日本資本主義の

# 転換とはなにか

高橋 崇

戦後五〇年、日本資本主義は大きな転換点に位置している。

戦後日本資本主義の高度経済成長を支えてきた農村、農民の根底的な解体は、労働力再生産構造の新たな模索を余儀なくしている。今日のような長期におよぶ企業のリストラ・再構築期に当って、クッションの役割を荷ってきた農村社会の崩壊は、都市の一層のフラム化をすすめるものとなるであろう。

各産業の調和のとれた発展を求めず、一人農業・農民に犠牲を強いてきた日本資本主義は、欧州、北米資本主義からみても特異な存在をなして

きた。農村の解体は、地域経済の崩壊であり、資本主義生産様式の発展という点においても均衡を欠いたものである。

一九九二年農水省企画室予測でさえ、五五歳未満の基幹農業従事者は、九〇年百十三万人から二〇〇年には五九万人に半減するとしてきた。

コメの部分自由化に加え、乳製品やでんぷんの輸入、さらにはリンゴなども含れるなら、この数字はより加速されるであろう。しかも、農水省は、

一九九二年に農業基本法の改正を念頭において「新しい食料・農業・農村政策の方向」と題する政策を発表している。この、いわゆる新政策は、営

農者に企業経営方式の導入を求めたものであり、労働力の集約、すなわち農地の集約を求めたものである。しかし、大陸的地形と異なる山間地農業にこのような政策が定着することはないであろう。

日本資本主義の発展は、最早政策的に手直し可能な段階を超えていると言っても過言ではない。たとえばコメを一つの例にとってみるなら、この二〇年間の減反政策によつて備蓄をゼロにしてきた。その結果、八二年につづく三度のコメ輸入となったのである。今次の二百万トンと言う数字は、世界市場における二割である。また、東北六県の

生産高に匹敵する量でもある。二〇〇年には五九万人に半減すると農水省は予測したがこれを大幅に上まわる減少傾向を示すのは明らかである。今日の日本資本主義の再編とは、過剰生産恐慌と金融恐慌の同時恐慌にある。この恐慌をもたらしたものが輸出主義大量生産とバブル経済（佐伯陽介氏流には空資本）である。こうして、貿易収支の黒字にもかかわらず国家財政と地方公共団体（自治体）の赤字は一九九五年度中には四百兆円にも達する見込みである。



者であり、出稼ぎと兼業を余儀なくされてきた。さらに、社会資本の欠乏によって飢餓状態に放置されてきた。したがって、多くの疾病死者を出しつつせられてきた。その数、十五万人もの傷病死者を出しつつつてきたと伝えられ、サパティスタ民族解放戦線は、必要とあらば目的に十五万人の死を覚悟でさらなる決起を継続すると大統領をはじめとするメキシコブルジョワジーに対して警告を發した。

一月一日、メキシコでの先住民解放戦線による武装蜂起は全世界のブルジョワジーを震撼させた。

一月一日、メキシコブルジョワジーは喜びに沸きかえっていた。それは、北米自由貿易協定に加盟出来、その発効の日であった。この発効の日に合わせて、サパティスタ民族解放戦線は武装蜂起した。

メキシコ総人口八、七八二万人のうち二五%が先住民であり、その大半は最下層に位置づけられてきた。しかもその多くは、第一次産業労働

昨年秋、第2回国際先住民族指導者会議をメキシコで開催され、リゴベルタ・メンチュウ女史は、「先住民年、しかし、理念だけが空回りし、有効な活動はない」と。帝国主義国家と諸国民に深い失望の念を表明している。

その開催の地であったメキシコでの武装蜂起は、リゴベルタ・メンチュウ氏の失望と同時に警句へ、何も応じなかつたメキシコ政府に対する戦線宣言である。

### 産業の空洞化

日本資本主義の製造業における空洞化については多くの識者と日常的にはマスコミにおいても報道されているところである。その指標についてははいずれ明らかになる機会もあろう。

ここでは、「いのちとくらし」われわれの「たべもの」といのち」についても少し進めたい。

すでに日本における農業事情の一端についてはのべた。にもかかわらず、われわれは、バナナも、エビ、コーヒーも腹一杯たべ、のむことができ、不思議について考えたい。日日、変った野菜をたべ、目新しい生花や動植物を鑑賞することのできる不思議について。

この不思議について、帝国主義・新植民地主義的多国籍企業にあるということ、あるいは「開発独裁」・「南北問題」にあると、それ自身は疑いをいれない所である。

日本における独占資本主義の戦後の発展は、ヨーロッパ・北アメリカと異なっており、つつもなくなってきたものであった。国民国家・国民経済をなしたたせてきたことが不思議なくらいにかたよってき

た。それは、単に労働力の集中としてあつたのみならず、地域経済の崩壊にもかかわらずそれを受け入れてきた国民・農民のエネルギーを農協を通して推進してきた。農協は総合商社であると同時に政治的利害団体の役割も荷つてきたのである。しかし今後の農協は、売るものはあつても農民から買うものはない状況となるであろう。

さて、世界の食料事情は、ますます、プランテーション化、モノカルチャー化され、生産者（農業従事労働者）が自らの生産物をたべられない事情を拡大するであろう。今日、バナナ、エビ、コーヒー労働者が自ら生産するバナナ、エビ、コーヒーを食べ、飲むことができないようにである。世界の人口の増化にともなう食料事情はこれからますます深刻化する。

### 国際連帯と農民党

われわれは、利便さ、豊さとの一方で寄るべき大地の恵み・環境と風景を失ってきた。最も大事な精神的な豊さを失ってきた。特に、農民は憤りを忘れたかのごとく、地域の家族の人間関係さえ、スタズタにされそれでも資本家と目

民政府および都市生活者に従ってきた。コメの自由化にあつてあさき、フランス農民やアメリカ農民のように決起しなかつた。

しかし、ようやく農民党の必要を説く人々が少数ではあるが現われてきた。この人々には必ずしも流通資本・大地を守る会や生活消費協同組合と結びついた運動としてはない。むしろ専業農家で、これまで十分農業で家族を養つてきた人々によつてである。

日本資本主義のホコロビがようやくその足下で地殻変動を起しつつあるのである。われわれは、戦後五〇年、日本共産党も社会党も組織し得なかつた農民の組織化に三里塚芝山農民との交流を礎すえに断固としてこれを支持し一九九五年統一地方選と参議員選における「政治決戦」にうちかたなければならぬ。

### カオスの時代にインターの旗を

二極構造の崩壊にともなう混沌の時代に突入した。資本主義は、象徴的には、日本独占資本主義の構造転換として現われている。とは言い、ドイツにあつても十二時

間労働を主張する企業・経営者が現れてきているように、今日の行きづまりは世界的なものである。最早一国的にすべてが解決しうるほどのものではなくなつてきている。政治的にも、ロシアでの大民族主義の抬頭からイタリアでの北部同盟、クリントンの保護主義的傾向、日本における低成長型中道右派の連立内閣など。

ソ連邦の崩壊は同時に世界市場の混乱、帝国主義による世界戦略の未確定として混乱の極に對している。

しかし、本質的に、一月一日、メキシコにおける先住民族による武装蜂起にみられるように、帝国主義に對する被抑圧民族による抵抗斗争は、東チモールでフィリピン、ミャンマー、などアジア・アフリカ地域でやむことなくつづけられている。わが国内においても、階級斗争の姿も概念も変えているとは言え、アイヌ民族解放斗争に連帯する運動は急速に発展してきており、あらゆる階層で抵抗斗争は芽ばえてきている。なによりも農民の芽生えこそ、労働者階級と市民に對する援軍となるであろう。

一九九五年、広島・長崎をふたたびおもいおこして、一九九五年、「エノラ・ゲイ」

展示に断固抗議するとともに、自らの侵略の歴史に終止符を打つべく今、から心してゆかねばならない。

北アメリカ先住民解放斗争の指導者の一人であるデニス・バンクス氏は昨年夏沖縄で、北海道二風谷で、一九九五年、環太平洋先住民族の国際会議を沖縄でやろうとよびかけた。

われわれはこの、「エノラ・ゲイ」への抗議・反戦斗争と合せて、環太平洋先住民族国際会議の成功に向けて邁進しようではないか。

さらに、われわれは、三里塚斗争のシンポジウムの勝利にひきつづいて、政府・公団用地のすべてを解放すべく「地球実験村」の構想を支持し二期を文字通り白紙にしなければならぬ。三里塚芝山農民のたたかいた最後の最後まで支援し、空港の廃港へむけたたたかいたをさらに押しすすめるのでなければならぬ。

細川連立内閣を打倒せよ。歴代自民党内閣の懸案事項であつた、コメの「自由化」、小選区制度の導入をわずか半年でやりとげた。実に恐るべき強権内閣である。この強権内閣の象徴の一つに山花社会党大臣がいる。山花は、アイヌ民族議席を認めない理由として、憲法十

三条、四三条、四四条を挙げている。「憲法に抵触するからダメだ」と国会で答弁した。この弁護士上りの大臣は、憲法に抵触している。明治刑法、暴発物取締り法、自衛隊とPKO、なによりも憲法一章の一条から八条までは、第十章、九七条最高法規としての基本的人民に抵触しているのではないか。成田新法から破防法さい憲法に違反している。

社会党山花大臣は、「旧土人保護法」を知らないはずもあるまい。これこそ憲法に抵触しているのではないか。連立政権とは、数をたのみとする自民政府以上の詭弁を弄した強権内閣であることは、以上をみても明らかである。しかも相つぐ公共料金の値上げと消費税の大巾なアップを計画していることを合せると一日も早く倒さなければならぬ。

一九九五年、統一地方選から参議院選、そして、国際反戦斗争へ。一九九五年、一大階級斗争・階級決戦に向けて大爆発を獲とろう！

一九九四・二・十五

# メキシコ先住民族の武装蜂起支持

サパティスタ国民解放軍(EZLN)は一月一日チアパス州一帯で武装蜂起した。

メキシコ政府は、北米経済機構に加盟することによって北アメリカ、カナダに次ぐ先進国入りにうかれていしかし、アメリカやカナダがそうであったようにメキシコも先住民族の犠牲のうえに工業化や都市化をすすめてきた。都市と農村の格差というにとどまらず、メキシコ南島部にある先住民の生活は、農耕さい適さない土地で、医療機関も教育機関さえ満足とは言えない状態におかれてきた。そこでは、先住民の権利はいうにおよばず最低の生存に必要な条件さえ満足されず極限の状態におかれてきた。

メキシコ南島部(チアパス州人口約三百二十万内三十%は先住民)における先住民族の正月武装蜂起は、都市住民の間からさえ「暴力は良くないが主張は正当だ!」という声に支持されている。

朝日新聞一月十四日報道によれば、EZLNは、貧困問題への解決に施しは「いらぬい」と。あくまでも、先住民族の先住権をはじめとする民族的権利回復と名譽回復をしてゆく姿勢を鮮明にしているのである。

これまでのメキシコ政府、とりわけ現サリナス政権は、

先住民族の小集会すら弾圧してきた。そうした意味では武装斗争以外に道はなかったのである。しかも、サリナス政権は、今次武装蜂起に対して、オコシゴ地区のみならず、先住民族の住居、家屋の一切を無差別に爆撃した。無抵抗の住民さえ手足を縛られてなお虐殺された。

メキシコ先住民族は、今回の武装蜂起を「死を覚悟した抵抗だった」(朝日新聞)と、マスコミも報道しなければならぬほどに追いつめられていたのである。同じく報道によれば「この十年間に治療可能な病気で十五万人の先住民が死んだ。もう無駄な死に方はしない。必要ならあと十五万人死ぬ用意がある」と、EZLNは述べた報じている。

われわれは、昨年の「国際先住民(族)年」に際して、わが国における先住民族であるアイヌ民族の永年の主張であるアイヌ民族基本法とも言うべき「アイヌ新法」の早期制定運動を支持してきた。内なる国際化を果さず、「普通の国家」すなわち、経済大國にふさわしい軍事大國化をもつて国際化するという小沢一郎流国際国家化論をその足元かくすべく活動してきた。今年にはあらためて「国際先住民族年十年」のはじまりの年である。

国際的に先住民族の権利を擁護する声が高まるなかで、メキシコ先住民族の武装蜂起は、全世界の先住民族へのメッセージであり、人権擁護団体と先住民族と共生を願うすべての人々の年頭のあいさつである。

われわれは、このサパティスタ国民解放軍(EZLN)のメッセージを弾固支持するものである。

メキシコ政府はただちに一切の武装弾圧を中止せよ!メキシコ政府は、サパティスタ民族解放軍(EZLN)と無条件で話し合いに応じよ!

メキシコ政府はただちに先住権を認め、その名譽回復を計れ!

一月十一日 埼玉県比企郡小川町に 金子美登氏を訪ねた。午前十一時、金子さん夫婦にお父さんお母さん、それにタイからの研修生他三名の研修生を含め八名が農作業の最中であつた。

訪問の趣旨は電話で伝いてあつたので、早速簡単な営農規模と金子さんの農法の説明

## 「未来をみつめる農場一土と太陽のめぐみに生きる」

著者 金子 美登 岩崎書店発行

書籍紹介

農法に取りくみ地域でも農業の空中散布を中止させたり、ゴルフ場開発を断念させたり、更に、海外からの多くの研修生を受け入れてきた。今、手元にある『未来をみつめる農場』はそうしたたかいたかの書ではなく、むしろ農業のもつている社会的役割や有機・微生物の働きによる動植物と人間の健康の話である。しかもそれらが原理的に深められたものとして論をすすめているのである。農業とは、土と水に関わることであるがそれは土をつくることからはじめ水は利(水利のみ)を考えられることより水によって生きられることを考えることと説く。

七年前に出版されたものを、本年一月一日付で英訳版として出版されたものであり、児童書を専門とする岩崎出版ということもあつてある意味で初心者むけということもできる好著である。

日本農業は、高度経済成長とともに、その裏がわに押しやられ反比例のごとく衰微の一途をたどってきた。農業協同組合はその片棒をかつぐ役割を担わされてきたとも言えるのである。そこで、農協に頼らない農事組合や共同出荷組合などが各地に生まれてきている。しかもそれらは、生活消費協同組合と結びつか

を受け農作業の手伝いをしつつ話しをすすめた。

金子美登さんはこれまで、『われら百姓の世界』、オルタ二号特集『百姓が世界を変える』など多数の出版物で発言してきている。

金子美登さんは、日本有機農業研究会の会員として有機

金子 友子  
〒三五五二〇三 埼玉県比企郡小川町下里八〇九

# 死刑制度の廃止 を実現しよう

竹谷俊一

昨年三月と十一月に合計七名の死刑執行が行なわれた。十七年ぶりの大量死刑であった。三月は、宮沢内閣の後藤法相が、十一月は細川内閣の三ヶ月法相が、死刑の命令を出したのであるが、内閣が自民党から連立政権に変わったとしても、死刑の執行によって社会の秩序を維持することに関しては同一の発想を有していたわけである。

われわれは、死刑の執行に反対である。死刑の廃止に賛成する。死刑は、ブルジョア的な契約思想からすれば残虐な刑罰であり、封建時代の遺物である。イタリアのチェザレ・ベッカリアは、すでに18世紀後半に『犯罪と刑罰』の中でこのことを展開している。現在の西ヨーロッパおよびアメリカ合衆国のいくつかの州では死刑が廃止されている。国連においては、すでに死刑廃止条約がつけられ、多くの国々が批准している。日本は、死刑廃止条約を批

准していない。昨年執行された七名の死刑は、マスコミで報道されただけで、法務省は公式には、処刑の事実を認めていない。つまり、日本国民が知らないうちに、秘密のうちに死刑が執行されているということである。アメリカでは、死刑の前に、死刑囚が、記者とインタビューしたり、死刑のあとで、公式に発表が行なわれ、全世界の人々が死刑が執行されたということを知る。日本の場合は、一部の役人しか死刑の事実を知らない。これは恐ろしいことである。

死刑執行の事実を隠すのは、暗に死刑が残虐であることを認めているのである。少なくとも、全国民が死刑の事実を知らなければならぬ。このような判断材料を提供されることによって死刑の是非をもっと良く考えることができるであろう。行政官僚が、国民に知らせるべきことをあえて隠すというのは、日本の政治の悪い体

質である。このこと一つとってみても日本の統治機構は、西ヨーロッパ各国、アメリカ合衆国にくらべて後進的である。日本の労働者階級が支配階級になるためには、情報の自由をかちとることが必要である。

とまれ、死刑廃止の気運は高まっている。死刑廃止に賛成の議員が、衆参両院で二百名以上いるそうである。細川内閣の閣僚も9名が死刑廃止を支持している。死刑に関する事実を広範な人々に知らせ、説得し、廃止の合意をかちとっていくことが必要であり、そのことがブルジョアの刑罰の残虐さを訴え、人民の力によって変革できるのだという自信をうえつけることにもなるのである。

刑は国家的な殺人であり、反省と贖罪の機会を奪うだけである。われわれは、彼らに生きることによって反省のあかしを示してもらわなければならない。これが、労働者階級の立場からは、もっとも良い、解決法ではないだろうか。それと同時に、殺人などの犯罪が発生する余地のない社会風土をつくっていくことが必要である。資本主義的な弱肉強食の競争社会をコミューン的な連帯の社会に変革すること

によってこのことを可能にしようではないか。

## さしげ(徳二氏) 自宅で不当逮捕される!

読売、毎日新聞によれば、一月七日 国分寺市内の自宅

ある。あまつさい、いわゆるこれを事件であったとしても、すでに一九九〇年にはこの事件にかかわる公判の一切は終了しているのである。

反安保・日帝打倒をよびかけた政治集会での発言で破防法違反に問われ再逮捕されたのである。

にもかわらず、警視庁公安部が保釈逃亡を理由に再逮捕したのは、「悪法も法なり」として、破防法の恫喝をもって、既成政党の凋落といわゆる政局のカオス状況に対して、ふたたび新左翼の到来に対する警戒の証のなにもでもない。

二八沖縄闘争」における・さしげ 徳二氏の発言が青年労働者、学生に決起を訴えたものであつて、それが扇動罪として罪となるようでは、一切の政治活動はできなくなる。

新左翼は、三里塚闘争の勝利にみられるように、ふたたび日本帝国主義の不吉な鎌首をもたげてきたのに対する一大反撃を準備しつつある。新左翼は破防法の恫喝に屈す

社会的・法的責任が問われなければならない。しかし、死

現憲法の下では無効のほす



# 三里塚闘争の勝利にむけて

はじめに

三里塚闘争はある意味で十  
五回のシンポジウムで、三項  
目の合意によって完全に勝利  
した。

ある意味で、とただし書き  
にしたのは、現代世界・資本

主義的生産様式の転覆として  
のプロレタリア世界革命をめざ  
した三里塚闘争でも、絶対廃  
港としてコンクリートをひっ

ぺ返す闘争でもなく、あくま  
で農民たちの農民によるボタ

ンの掛け違いに対する憤激と  
しての、極めて民主主義的手

続への異議申し立を動機とす  
る同盟であったということ。

この農民の気持を一貫して逆  
なでし公的暴力、機動隊政治

によって常に強制を頭文字と  
する測量、クイ打ち、土地収

用と引きつづいてきた。政府  
・公団と千葉県は、常に強制

・暴力を頭文字として一切の  
民主主義的手続・すなわち、

当該農民、直接利害をもつ農

民と話し合うことなく無答無  
用で空港建設を押し進めてき  
た。

この理不尽をシンポジウム  
でことごとくバクロされ、ち  
くいち政府・公団と千葉県は  
謝罪を繰り返ざるを得なかつ  
たのである。

例えば、大木（小泉）よね  
さんを排除し土地を収用した  
のも、法律にもとづいている  
と強弁する運輸省に、では、

大木（小泉）よねさんに傷を  
負せ、いやがるよねばあさん

を機動隊数人で足げにしなが  
ら排除した法律は何かという

問いに、警職法だというに及  
んでは、居ならぶ字識経験者

のみならず失笑をかったこと  
は言うまでもなく、それほど

の緊急性も全くなかったこと  
がバクロされた。その証拠に

開港は、第二次強制執行から  
五年も経過してのちのことだ

あり、しかも燃料運送パイプ  
ラインから、道路の取りつけ

・騒音対策に至るまで含めて、

早期開港はとても無理であつ  
た。したがって、大木（小泉）  
よねばあさんの排除と土地の

強制収用に緊急性はなかった  
ことは明らかであり、そのこ  
とをも結果としては運輸省・  
公団は認めざるを得なかつた  
のである。

現空港の廃港を主張する人  
々は自らの政治主張にどれほ  
どの信憑性をもって主張して  
いるのか。

三里塚芝山農民にとつてた  
たかいは、評論でも、遊び

でもない、  
三里塚闘争における反対同

盟は文字通り生活も命も（三  
の宮・東山氏をはじめ幾多の  
犠牲）賭けたたかいかである。

しかもすでに、二世代にまた  
がるたかかである。完全勝利

とは言い、三里塚闘争は終つ  
たわけではない。新しいたた

かいは始つたばかりである。  
三里塚闘争の正念場は、文

字通りこれからである。

I シンポジウムから円卓会  
議へ

先ず最初に、シンポジウム、  
円卓会議反対の論拠を検証し  
てみたい。その最も無責任な  
論拠、あるいは、典型的な暴  
論に、『情況』十月号（一九  
九三年）がある。

題して「成田シンポジウム  
を批判する—空港廃絶闘争の  
現局面—」なる論文である。

もちろん、この情況十月号  
は、反対同盟の意見はおろか、

シンポジウム賛成派の主張、  
当該である反対同盟の主張を

並立で掲載したわけではなく、  
その後も掲載していない。

情況出版社の姿勢はともあ  
れ、何故、情況十月号論文が  
無責任な暴論であるか。

情況十月号 執筆降旗節  
雄は、その冒頭において、一、

土地収用申請取り下げと、一、  
B・C滑走路II二期工事の白

紙に対して、強い疑念をもつ。  
として、「力の対決」は終つ

ていないこと、白紙と言うな  
ら「広辞苑」によれば「何も  
なかつたもの状態」にせよ、  
つまり、絶対廃港、コンクリ  
ートはをハガせと主張してい  
る。しかし、この降旗節雄の  
主張の論拠、あるいはその実  
力闘争とその廃港への道筋は、  
何一つ示されていない。何一  
つである。唯一それを根拠づ  
けているのは「反対同盟の北  
原事務局長は「白紙撤回とい  
うなら二十七年前の山野に戻  
せ」といつている」に依拠し  
ているにすぎないのである。  
それ故、降旗節雄は、第十四  
回シンポジウムに反対同盟が  
提案した三項目に対してケチ  
をつけているにすぎない。  
（この三項目提案を隅谷調団  
と政府公団は了承した）農民  
（反対同盟）は、政府を甘く  
みているとか、結局は強制土  
地収用に道を開くものである  
とか、全く予断と偏見で物を  
言っているにすぎないのであ  
る。農民のしたたかなたたか  
い、農民の主体性を根本から  
信頼していないのである。降  
旗節雄は、その冒頭で「力の  
対決」を信奉しているかのよ  
うな言説をはいているが、そ  
の力とは通常これまで言われ  
てきた所のいわゆる「実力斗  
争」を示唆しているのである  
う。だがしかし、「実力斗争」  
IIゲバ棒と火焰ピンに象徴さ

れたたたかいを組織しうる党  
派・セクトはおろか、そのよ  
うな農民は一体何処に存在し  
ているのか。また、そのよう  
な社会的背景と時代状況に今  
日あるのかどうか。運動とは  
まさしく生きた人間の生味の  
身体をはったたたかいなので  
ある。二十坪や三十坪の教室  
の中で講義しているようなわ  
けにはいかなないのである。

そこで、降旗節雄は、反対  
同盟がシンポジウムの締めく  
くり当って、全国民にアッ  
ピールした「仮死の土地に地  
発しを」に対して、その論文  
の内容には「全く私と考え方  
を共通にしている」と述べつ  
つ、しかし、シンポジウム  
での三項目合意には納得でき  
ないと。その理由こそが、先  
のB・C滑走路の白紙化には

疑念があり、したがって力の  
対決は終つていないという以  
上のことではないのである。  
降旗節雄は、「成田における  
『力の対決に終止符』が打た  
れたとするマスコミの大合唱  
の空疎なことは明らかである」  
と結んでいる。

降旗節雄の言う力とは何を  
意味しているのか、少なくとも  
も先きの「ゲバ棒・火焰ピン」  
程度のこののみを指している  
としたら、農民を主体とする  
地域住民の力をそれこそ甘く  
みくびつていてのではないか。

降旗節雄の言う力とは何を  
意味しているのか、少なくとも  
も先きの「ゲバ棒・火焰ピン」  
程度のこののみを指している  
としたら、農民を主体とする  
地域住民の力をそれこそ甘く  
みくびつていてのではないか。

降旗節雄の言う力とは何を  
意味しているのか、少なくとも  
も先きの「ゲバ棒・火焰ピン」  
程度のこののみを指している  
としたら、農民を主体とする  
地域住民の力をそれこそ甘く  
みくびつていてのではないか。

シンポジウム・円卓会議はこれからの「民主主義」の一つのあり様をも示唆しているのである。

少なくとも反対同盟は、このシンポジウムで、政府・公団と千葉県を圧倒する資料と論陣を準備し、ことごとく政府・公団のこの二十五年間の空港建設に関わる「事件」に対して謝罪もさせてきた。まさしく、力の対決において勝利した結果としての三項目合意であったのだ。話し合い路線反対！実力闘争堅持派の主張こそが北総台地に空しくこぼれ落ちていたにすぎなかった。

降旗節雄大教授主張するところの絶対廃港・力の対決こそ「空疎」なことは明らかである。次に、シンポジウムの反対、円卓会議粉砕派の主張を見ておきたい。

そもそもこの人々は、論理以前、政治主張ならざる一つの政治として反対同盟・農民に対峙している。事の発端は、一九八三年三月八日反対同盟員総会による分裂にある。この分裂を路線の対立として承認するのではなく、脱落、なるレッテルの下、農民とその支援グループに対してテロルを繰り返してきたグループである。

このグループでは、三里塚

芝山連合空港反対同盟の分裂後、十年を経過した今日においてさえ、政府・公団とのたたかい以上に「脱落派粉砕」をメインスローガンとしている始末である。「敵前の敵」として味方であるべき農民や労働者、市民、地域住民に対して、目的的にバリケードでへだてようとしているのである。

ここに、一つの記念碑的パンフレットと文章がある。われわれは、このパンフレットを読み返し、ふたたびこの行間にあふれる党派・認識人に対する農民の不信感の深さを思い知るべきである。

『農地死守・空港粉砕の旗を掲げて』  
三里塚芝山連合空港反対同盟小川派の主張と題された約百頁に及ぶ小冊子である。この小冊子、刊行にあたってを少し引用しておく。

以下引用  
一九八七年九月四日、三里塚芝山連合空港反対同盟・北原派の分裂は、三里塚に心を寄せる全国の人々に大きな衝撃をあたえた。

その後の事態、特に一〇月一日の小川派集会に対する北原派による妨害行動は、更に大きな衝撃をあたえた。分裂後に全国の人々に伝えられ

た情報はかなり一方的なものであり、分裂していった小川嘉吉さん、島村良助さんらに對し、「条件派への道を歩むもの、脱落派」であるとのキャンペーンが喧伝された。現地に於いても、小川さんたちに対する恫喝、いやがらせ、「糾弾」と称した諸行動が、北原派支援の諸党派によって繰り返されている。

昨日までの「闘う農民」「闘う敷地内」が、いつ、どのようにして条件派になり、脱落していったというのであるのか。私たち本パンフレット刊行委員会は、この間北原派反対同盟主催の現地集會に参加してきた無党派メンバーの有志で構成されている。

本パンフレット以前に、今回の分裂問題に関しては、二つの雑誌が取りあげている。新地平一二月号「自己絶対化は運動を破産させる」(菅孝行)と、インパクション五〇号「三里塚特集」である。本パンフレットと併せて読れることをお勧めしたい。

『農地死守』パンフレット刊行委員会  
一九八八年二月

目次  
農民が主体的に闘うということ  
小川嘉吉  
必然だった分裂  
小川嘉吉

# せまり来る大変の時代をどう生きるべきか？

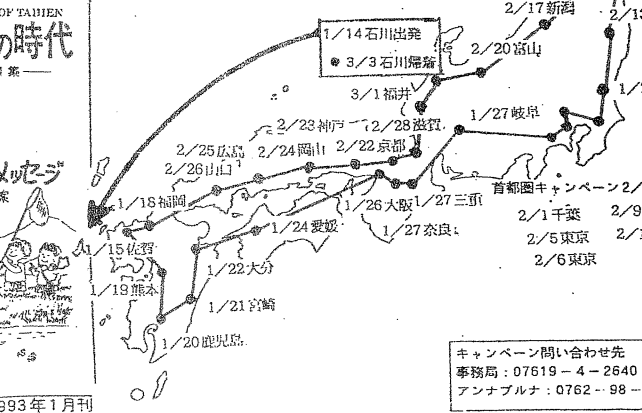
## 94冬「やっぱり百姓になろう」全国キャンペーン



THE ERA OF TAIHEN  
大変の時代  
第一集  
このことを訴えて1/14より3/3まで全国キャンペーンをやります。仲間が皆さん、心あるマスコミの皆さんのご支援を賜りますようお願い申し上げます。日本世直しネットワーク呼びかけ人 百姓 宮本重吉

キャンペーン挨拶文  
日本最後のとりで米城が落ち、都会ではいよいよ雇用調整が始まり、日本中が失業と不安に満ちている。そして近い将来、大パニックが起こるかも知れないと多くの人が思い始めている。政治の腐敗退選は、今更指指するまでもなく、社会のリーダー達は全く方向を見失ってしまった。まさに「大変の時代」の様相である。

- キャンペーンの目的  
一、国民的大規模運動の提唱  
二、日本世直しネットワークの仲間の交流と拡大  
三、全国の百姓仲間との交流  
四、政治ネットワーク「地球農民新党」結成準備  
五、機関誌「大変の時代」の販売



THE ERA OF TAIHEN 大変の時代 第二集  
自然循環的な暮らし方の日本をのぞいて  
食糧自給のネットワークを  
アイガモ一帯で  
泥つき百姓を国会へ

THE ERA OF TAIHEN 大変の時代 第一集  
特集 おもしろ百姓  
鳥越共和国からのメッセージ  
21世紀日本の理想の暮らし方の提案

「大変の時代」第三集もくじ  
特集一 田舎において大合唱  
「やっぱり百姓になろう」  
「やっぱり百姓になろう」など  
と題しているアナタへ  
ある新米脱サラ百姓の一日  
食糧自給からエネルギー自給へ

注文書  
「大変の時代」  
第1集 ( ) 冊  
第2集 ( ) 冊  
第3集 ( ) 冊  
住所 〒  
氏名  
電話番号

キャンペーン問い合わせ先  
事務局：07619-4-2640  
アナブルナ：0762-98-8864

「農民は農民同士」の気持

島村初枝

「支援」って何?

島村不二子

座談会 敷地内農民を中心に  
一致団結して頑張ります  
引用以上

一九八三年三・八分裂がそ  
うであったように、つい昨日  
まで天高く持ち上げられてき  
た百姓は、突然に「条件派、  
脱落派」なるレッテルで呼び  
すてにされる。呼びすてにで  
きる精神構造とは一体何なの  
だろうか。

目次を一瞥しても解かるよ  
うに、ことさらに農民が農民  
の主体性を強調しなければな  
らない。加藤俊宣さんは、素  
直に「百姓の気持がわかって  
支援してもらえれば最高」と  
述べている。さらに、島村不  
二子さんに、「支援」って何  
?とさい述べざるを得ないと  
ころまで追いやった前衛党と  
は何か。

つまり、今日、シンポジウ  
ム、円卓会議粉砕を呼んでい  
るセクトの多くは、自らの指  
導責任と説得する能力のなか  
ったことを棚上げし、「政治」  
ならざる政治的引きまわしを  
事としているにすぎない。こ  
のような思想こそが、われわ  
れを含めて左翼は問われてき  
たのである。

北原派の八七年の分裂とは、  
まさしく、八三年三・八の分  
裂以上の重みを左翼につぎつ  
けていることは疑いないので  
ある。この重みを一顧だにす  
るとなく、憶測と予断と偏見  
でもって、シンポジウム・円  
卓会議粉砕・脱落派粉砕を運  
動の中心テーマとするに至っ  
ては何をかいわんやである。

彼らは、その機関紙上で  
「現在、二期工事は完全にス  
トップしたまま打開のメドも  
たらず」と、二期工事中止  
を認めている。勿論、彼らは、  
二期工事中止は「実力闘争」  
「力の対決」によって実現さ  
れているとするのである。と

ころで、このような「実力闘  
争」に水をさすものこそ「シ  
ンポジウムであり、円卓会議」  
であり、その中味は、「『B  
・Cパーター案』で木の根売  
り渡しを策動する脱落派・石  
毛を断罪せよ!」とか、「用  
地売却を迫る」ものだと主張  
しているのである。彼らのこ  
の「策動」「迫る」なる根拠  
は何も示されていない。シン  
ポジウム、円卓会議がそんな  
のだという以上のことではな  
いのである。そこで、彼らは  
「石毛は運輸省と裏で密通」  
しているという推測をせざる  
を得ないのである。こうして、  
彼らは、「断固たる鉄槌ある  
のみだ」と絶叫するのである。

彼らのこの鉄槌とは、テロル  
を意味してきた。  
彼らのこのような運動なら  
ざる運動、政治をならざる政  
治を容認する雑誌や「学識経  
験者」の良心を疑うものであ  
る。

II章で円卓会議を中心に  
III章で三里塚闘争のこれか  
らについて次号以下で展開す  
る。なお第3回円卓会議報告  
ほかについては、『三里塚に  
緑の大地を!』再刊八号  
(1984・2月発行)の一読を  
是非すすめるものである。

資料  
① 三項目の合意  
II 運輸省空港公園による  
取用裁決申請の取り下げ  
III 工期工事B、C滑走路  
建設計画を白紙に戻す。  
③ 今後の成田空港問題の  
解決にあたっては  
「空港をめぐる、地域  
のコンセンサスをつくりあげ  
る新しい場」が設けられ、そ  
この委ねられるべきである。

② 第四回円卓会議の今後の  
方針、円卓会議運営委員長  
隅谷三喜男提案  
三つの方針  
参考文献  
① 岩波新書「成田」とは何  
か」宇沢弘文著

反対同盟文書 一九九一年  
十一月二十一日発行文書掲載  
徳政をもって一新を発せ

② 情況十月号

降旗節雄 論文

③ 三里塚芝山連合会空港反対  
同盟小川派

「農地死守」パンフレット

刊行委員会

④ 世界一月号

「成田」の教訓—社会的公  
正とは何か—

三項目の合意文掲載

⑤ 『三里塚に緑の大地を!』  
再刊七号

発行三里塚に緑の大地を!  
労働者・学生・市民の会

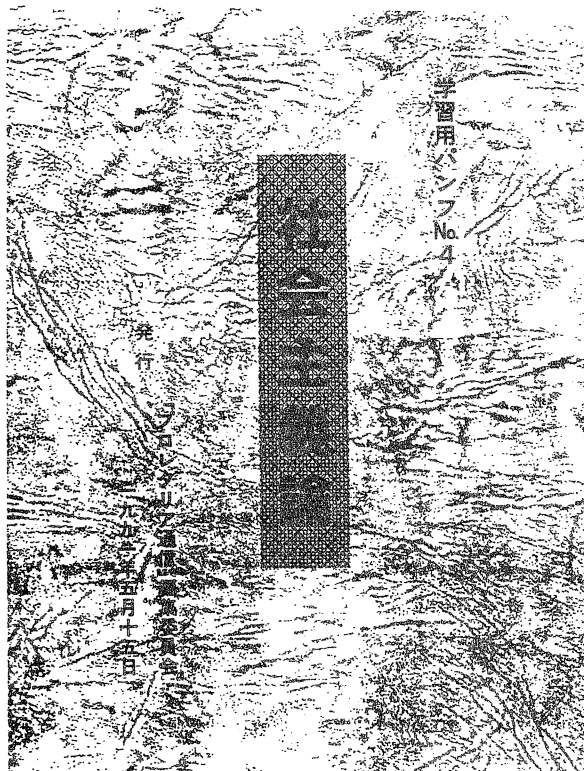
三里塚芝山連合会空港反対同  
盟 一九九三年五月二十四日

仮死の土地に地発しを、掲  
載

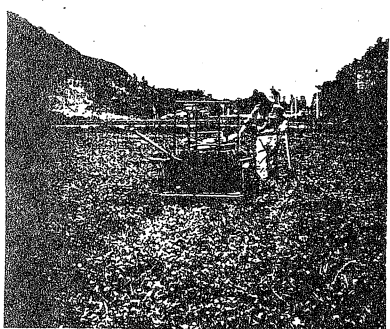
### 東京と沖縄を結ぶ反天皇制運動

東京と沖縄を結ぶ天皇制を考える会

発行日 一九九一年六月



### 未来をみつめる農場



金子美登

本書は岩崎書店発行「未来をみつめる農場」(金子美登・著)の英訳版です。

頒価=1200円(私家版)

# 情勢と細川政権について

## スローガンとその内容をめぐって

旭 凡太郎

(昨年、PKO闘争の中間的総括を、スローガンとして討議し、まとめた。当文章はそれの趣旨をまとめたものである。)

### 細川政権の歴史的

### 位置

細川政権の「国連常任理事国入り」、「政治改革・規制緩和」、「分権」等は、帝国主義の不均等発展と再分割戦の激化の下で、日本の経営ならびにNICS・開発独裁で自信をもったブルジョワジーが、しかしそれのみでは再分割戦に勝利できないことを対イラク戦争で思いしらされて、それを軍事、政治、社会的経

済的分野へと押し広げようとするものであった。

すなわち敗戦帝国主義の戦勝國（アメリカあるいは英仏）

なみ侵略帝国主義への転化がその第一である。さらに行革・国労解体・連合結成で一応勝利した政治支配、効率的労働者分断支配を、政治的には

二大政党体制へとすすめる。社会的にはまたは労働力再生産としては日本型福祉（自助努力、家族依存、労働者分断）をすすめる、さらには農村・農業を一層（金融資本・工業の）世界市場支配のために従属・解体しようとするものであった。

そしてこれらにたいするおさえきれない諸抵抗（反戦、労・農・反差別・少数民族・自然保護・労働力再生産）あるいはいわゆる「あたらしい社会運動」を吸収または封じ

込めようとするものとして「（地方）分権論」が登場してきているわけである。しかも過剰生産・金融危機（不良債権）といった未曾有の不況が、その日本の経営連合の基盤そのものをも動揺させようとしていることへの危機感がこれらを加速している。

これは現代帝国主義の諸問題、すなわち帝国主義の不均等発展における今日的勢力圏、さらにはこれを規定する金融資本・多国籍企業と関連している。

と同時にこの大資本による労働過程支配、労働力再生産過程支配、農業・自然支配と関連し、これらと差別ならびに労働対策と結合したものである。

それと第三世界、そこでの

NICS化、開発独裁、さらには多国籍企業による労働者農民分断支配・モノカルチュア・大土地所有再編・自然条件破壊とも関連している。そして東欧・ソ連スターリン支配の解体による階級闘争地帯化、民族紛争地帯化、第三世界化、帝国主義のこれへの介入またはこれの泥沼へと巻き込まれてゆくことといった事態と関連している。そしてこれらの全体のなかで帝国主義の侵略反革命の世界体系が再編され、他方第三インターを継承する共産主義運動の再編成が進行しているわけである。

### 現代帝国主義の基礎としての戦後型

### 集積（生産力）

これらを根元的に規定するものとして、戦後の集積（生産力）とその再編成がある。

それは一九二〇代アメリカにはじまり二次大戦後国際帝国主義に普及したものであり

I 直接的生産過程を起点とし流通・消費にいたる科学・技術支配と管理の体系と労働の単純化・階層分化といった労働様式を意味するフォード・テーラー・オートメーション・コンピュータシステム。

（それは物質的生産の省力化により非物質的労働、サービス労働、労働力再生産労働を拡大し、福祉、資本主義的文化等の労働対策が多面する条件をもつくりだしている）

II 耐久消費財を中心とする大量生産・大量消費という産業構造ならびに消費様式、といったことを直接には意味する。

これがさらに

I 資本輸出ならびに直接投資における製造業の比重増大、ならびに先進国間市場の比重の増大を結果した。（たとえばアメリカの直接投資残高を

みると、一九二九年対ヨーロッパ十八・〇％、ラテンアメリカ四六・八％だったのが、一九七九年四四・一％、一八・八％）と逆転した。

（さらにII 第三世界への直接投資・資本輸出における原料から製造業の比重増大へ（それはNICS化への起動力となった）

III これによって第三世界階級闘争は世界革命の一環としての反帝反封建から反帝・反封建・反開発（従属的資本主義化）へと発展した

IV 既述のごとく、資本、機械、科学、技術の主導権化と労働者の大規模な階層分化、単純労働者化をもたらし、さらに農村の解体（工業・都市への従属）と大量の労働者化をもたらし、諸階層あるいは被差別階層の都市化、下層労働者化を結果した。

V 労働過程の必要（技術、秩序、位階位制、差別、従順等）からの、労働力再生産への資本・国家の介入が全面化した。さらにこれは、戦後階級闘争への対応というかたちをとりつつ労働者分断と一体化したものである。この福祉をどうして全面化した。

VI 生産力の急速な増大にたいする、消費様式（工業製品大量購買）や部分的所得再分配が過剰生産力の顕在化を引



き伸ばし、且つ先進国間相互市場の急速なブロック化を引き伸ばし、延命させるとともに、危機の長期化と世界市場分割戦を全面的かつ構造的なものとしていく。

VII この生産力または集積は、一時的にソ連・東欧スターリン体制の解体をも結果せしめる遠因となった。といった諸問題をわれわれにつきつけているわけである。

### 戦争と社会的経済的諸矛盾

このことは革命における侵略戦争反対と社会的経済的諸矛盾との闘争の連関という問題を想起させ、さらにはレーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」、あるいは一時期のブンドの「前段階決戦」との相違を想起させ、革命にいたる戦線、組織の準備、任務の再検討を想起させる。

まず戦争が革命と反革命の焦点になることはまちがいない。が帝国主義間戦争、あるいは体制間全面戦争の想定は困難となり、ベトナム型侵略戦争、対イラク型民族紛争介入、更に東欧・ソ連階級闘争

なり民族紛争へひきこまれる（ユーゴではすでにはじまっている）といった民族解放闘争・階級闘争への介入が七〇年以降焦点になってきたわけである。

（ただしソ連階級闘争の決着のつきかたによって帝国主義との諸関係も変動するのだが）

他方、革命と反革命、帝国主義と反帝国主義、戦争と反戦がいかなる社会的経済的内容によって裏打ちされるかという問題がある（国際主義の内容もそれに規定される）。

それは戦線を闘いとるなかで、その運動と資本主義（とその国家）への具体的批判をとうして、同時に次の社会を創造・統治しうる実践的階級へと転化するといふもんだいでもある。

もちろんロシア革命における「帝国主義戦争を内乱へ」においても、同時に革命的労働運動、農民による貴族・地主の土地再分配、諸民族の自決を背景としたソヴィエト権力によってかちとられた。

とはいえ以降資本主義はより深化した。農業問題は地主の土地再分配問題から（当時ロシアのみならず日、独でも大きな問題であった）農業の工業への従属・解体問題の国際化へと発展した。

テーラー・フォード・オートメ・コンピュータと続く労働過程とその諸問題（管理・科学・精神活動の肥大化、階層分裂ならびに、単純化・細分化された労働等）、労働力再生産過程の独自の領域としての拡大とこれへの資本・国家の支配（大量消費をふくんでの）、差別的この労働過程・労働力再生産過程への編入はより徹底的かつ具体的な資本主義批判が要求された。

（ソヴィエトにおける一派のイデオロギー・政治支配と労働指揮の独占との結合とがこの領域の発展を阻止した力は想像するにたがわない）

この資本主義批判の実践的ならびに具体的なものとしての必要という帝国主義国にとずれた事情は、七〇年以降第三世界にもおとされた。

世界革命の一環としての反帝反封建、反かいらい政権・土地革命をかちとった中国、ベトナム革命以降、NICSS化・開発が問題の焦点となり、民族問題、反封建との関連とともに賃労働、農業問題、そこにおける国際的な階層分裂、が問題となってきたのである（レーニンの「帝国主義論」においても論じられているのであるが）。それはプロレタリア・農民の側からの国際連

帯すなわち開発・近代化批判と侵略反革命批判との結合の問題としてあり、ブルジョワ側からの国際貢献論との闘争の中心となってきたわけである。したがって帝国主義の侵略戦争（準備）との闘争と、資本主義・賃労働の具体的諸形態、それを再生産するための政治・社会・イデオロギー・文化をふくめての労働力再生産、それと不可分な差別、あるいは農民問題との結合、その国際的連関、が一貫して問題となっているわけである。具体的というのは、たとえば賃労働一つとっても、そこでの労働者相互の競争、階層分裂、相対的過剰人口、精神労働・肉体労働、科学・管理、資本家相互の競争、諸階級との関連ならびに国際的連関、の実践的運動、論争、統一といった問題が、反帝・反侵略ならびに資本主義国家機構にたいする戦線の社会的経済的内容を形成してゆくものと考えることができる。

級へとプロレタリア・被抑圧階層を転化してゆくというところが課題となっているわけである。そしてこのように、帝国主義権力にたいして階級相互、階層相互の統一といった課題が問題となってきたとすれば、「内ゲバ」が単なる誤りという（スターリン型二分派物神）問題ではなく、革命の組織原理にかかわる問題であり、プロレタリア・被抑圧階層が資本と国家と闘いみずからを統一してゆくという課題への原理的破壊という反動的性格をもつにいたったことがわかる。

（他方三・八・シンポをめぐる、支援と農民の、あるいはプロレタリアートと農民の立場の相違をふまえての統一という課題においてもおなじ問題が存在した。

成田空港は侵略空港という問題とともに国家（工業）の農業・農民従属との闘いならびに農民の主体性という課題を有しており、農民は当初より後者に力点があり、かれらがこの観点から支援との間に一線を画したとしても、二期工事反対をかかげるかぎり協力するのは義務だという問題である。そこでの全国農民問題、地域、自然、というレベルからの空港阻止の運動ともいかに接点をもつかが問題と

なったというのが事態の中心だったわけである。）

### ロシア革命以降の資本主義の深化について

もちろん国際共産主義運動の総括からすれば、ロシアの労働者・農民・兵士代表ソヴィエト、ドイツ革命・イタリヤ革命とレーテ・工場評議会、反戦闘争と職場支配等の実践として存在してきたのであるが、資本主義と階級闘争は深化しているのである。

つまり資本主義への批判が抽象的ではなくあらゆる角度から粗上へのせられ、プロレタリア階級はその態度をせまられているのである。

例えば現代の生産力である多国籍企業が、第三世界を「近代化」し資本主義にひき入れることによって、そこでの現実すなわち国際的差別・分割支配といった賃労働、外国人労働者、都市スラム、モノカルチユア、森林破壊、大土地所有の利用・再編から資本主義の本質が粗上へのぼってしまっているのである。

あるいは被差別階層を都市化、下層労働者化することによって（アメリカ黒人問題や部落解放運動におけるしずめ石論のごとく）、資本主義が労働者を差別・競争・分割支配のもとにさらすことを本質とすることが組上にのぼっているのである。

あるいは教育・福祉等労働力再生産過程を資本と国家の下におくことにより、階級的ふりわけのみならず、選別、位階制、秩序、生産効率至上主義や管理・科学のそれへの従属といった労働過程（相対的剰余価値生産）の暗黒面を照らしている。それは分離収容や家族制度や地域が資本の剰余価値生産のための効率労働者分断支配と対になっていることをあきらかにした七〇年代以降の諸反差別運動によってより赤裸々になった。

あるいはその大量生産・大量消費と一体となった農業の工業への従属・農村解体・自然破壊が価値増殖の自己目的運動としての資本の本質を露呈している。

あるいはその価値増殖運動に規定されて一剰余価値生産に容易な耐久消費財等大規模工業の過剰蓄積、その結果としての反人民的産業構造ならびに過剰生産が顕在化した。そしてそれによって犠牲となっ

た労働時間短縮、労働者の労働ならびに社会を統治しうる条件のための時間・費用、差別克服のための時間・費用といった問題が浮き彫りとなった。

あるいはテラー・フォード・オートメ・コンピュータ、そこでの管理・テクノクラートの労働者からの自立・支配の労働の分化（科学・精神管理一反熟練・オペレーター下層単純労働）、分割支配と競争、これらは労働者階級への資本の支配の全面的性格を示すとともに、その一側面あるいはプロレタリアによる統治の核心をなす科学・管理・精神労働の問題とその労働者による習得の可能性を浮き彫りにしている（QC運動は逆説的にこのことをしめしているのだが）。

あるいは多国籍企業の世界市場支配が資本の必要性を、その過度の競争と過剰生産がすみやかな資本の消滅の必要（労働者・農民・住民がとってかわる）をしめしている。

あるいは以上あげた現象は、同じだけの資本主義・帝国主義とその国家の弁護論にもつながる。すなわち（ソ連・東欧分解以降一層声だかとなつて）価格メカニズム、生産の脱イデオロギー化と市場原理（第三世界の）近代化・工業

化・発展段階論、国際貢献、生産効率、秩序、日本の経営の優位性、社会の安定、工業一技術立国、ハイテク時代・サービス化社会、無資源国日本の生命線、普通の（帝国主義）国家と国際協力・これらのうえに帝国主義の不均等発展と侵略が存在しているわけだ。

プロレタリア階級の一次的後退と再起

そしてプロレタリア階級の今日の一次的後退とは、これら提起された問題の重大さに応えきれないということなのだ。そして単独ではそれを担いきれないということだ。（もちろん資本との賃金・時間・分断支配・雇用等での直接的闘争をたかかっているプロレタリアにおいてもつとも課題は自覚されてゆくのだが。）第三世界人民、農民、被差別階層、労働者階級の各層からの援軍と協力ぬきにはありえないということだ。実際そうなっているのだ。もちろん逆の道でもなければなら

ないのだが。（だからいわゆる革命主体としての労働者云々についていえば、それは直接的生産過程と、流通過程ならびにイデオロギー諸形態、諸階級と国家、との相互関係の問題ということになる）しかしいずれにせよ課題は客観的なのだ。根本的には生産諸力・集積に規定された資本主義の今日的段階である。

同時にその価値増殖運動に規定されて一剰余価値生産に容易な耐久消費財等大規模工業の過剰蓄積、その結果としての反人民的産業構造ならびに過剰生産が顕在化した。そしてそれによって犠牲となっ

た労働時間短縮、労働者の労働ならびに社会を統治しうる条件のための時間・費用、差別克服のための時間・費用といった問題が浮き彫りとなった。

あるいは多国籍企業の世界市場支配が資本の必要性を、その過度の競争と過剰生産がすみやかな資本の消滅の必要（労働者・農民・住民がとってかわる）をしめしている。

あるいは以上あげた現象は、同じだけの資本主義・帝国主義とその国家の弁護論にもつながる。すなわち（ソ連・東欧分解以降一層声だかとなつて）価格メカニズム、生産の脱イデオロギー化と市場原理（第三世界の）近代化・工業

化・発展段階論、国際貢献、生産効率、秩序、日本の経営の優位性、社会の安定、工業一技術立国、ハイテク時代・サービス化社会、無資源国日本の生命線、普通の（帝国主義）国家と国際協力・これらのうえに帝国主義の不均等発展と侵略が存在しているわけだ。

同時にその価値増殖運動に規定されて一剰余価値生産に容易な耐久消費財等大規模工業の過剰蓄積、その結果としての反人民的産業構造ならびに過剰生産が顕在化した。そしてそれによって犠牲となっ

た労働時間短縮、労働者の労働ならびに社会を統治しうる条件のための時間・費用、差別克服のための時間・費用といった問題が浮き彫りとなった。

あるいは多国籍企業の世界市場支配が資本の必要性を、その過度の競争と過剰生産がすみやかな資本の消滅の必要（労働者・農民・住民がとってかわる）をしめしている。

あるいは以上あげた現象は、同じだけの資本主義・帝国主義とその国家の弁護論にもつながる。すなわち（ソ連・東欧分解以降一層声だかとなつて）価格メカニズム、生産の脱イデオロギー化と市場原理（第三世界の）近代化・工業

化・発展段階論、国際貢献、生産効率、秩序、日本の経営の優位性、社会の安定、工業一技術立国、ハイテク時代・サービス化社会、無資源国日本の生命線、普通の（帝国主義）国家と国際協力・これらのうえに帝国主義の不均等発展と侵略が存在しているわけだ。

同時にその価値増殖運動に規定されて一剰余価値生産に容易な耐久消費財等大規模工業の過剰蓄積、その結果としての反人民的産業構造ならびに過剰生産が顕在化した。そしてそれによって犠牲となっ

た労働時間短縮、労働者の労働ならびに社会を統治しうる条件のための時間・費用、差別克服のための時間・費用といった問題が浮き彫りとなった。

あるいは以上あげた現象は、同じだけの資本主義・帝国主義とその国家の弁護論にもつながる。すなわち（ソ連・東欧分解以降一層声だかとなつて）価格メカニズム、生産の脱イデオロギー化と市場原理（第三世界の）近代化・工業

行した。(それゆえ帝国主義国への出稼ぎ・外国人労働者の増大はそれとの対応関係にあつて、善悪の問題ではない)

この従属的資本主義化をめざす開発独裁政権は、旧来の大土地所有下でのモノカルチユア化にとどまらず、小農のモノカルチユア化をおしすすめ、食糧危機、森林破壊、先住民圧迫、農村階層分化と都市スラム化を大規模におしすすめているわけである。

それはまた、NICCS化(アジアNICCS、中南米NICCS)、ASEAN・中南米、最貧国アフリカ、さらに石油貴族国への分化をおしすすめ、その一部は(韓国・ブラジル)帝国主義国の副官的位置を占めるにいたつた。

帝国主義・多国籍企業にたいする賃労働(底辺労働)、農業の工業への従属と、民族問題、大土地所有(フィリピン、中南米)との一体化のなかでの任務が問題となつたわけである。

これらのうえに、多国籍企業固有の問題—市場支配、利潤の本国送還、技術移転問題、累積債務といった問題が存在するわけである。とはいえこれら資本輸出・多国籍企業への抽象的批判や、旧来の反植民地論に内在していた近代化論(日共・宇野派

的工業化不可能論、あるいは従属派による帝国主義への統合批判まで)が明瞭化していったわけである。

そして労働者・農民・住民自身による政治・経済・社会の運営、その国際連帯・批判が問題となつていったのである。そして現実の工業化賃労働、農民の従属の国際的ヒエラルキーの再編成と、民族抑圧の世界体系の再編成

ならびに封建遺制または大土地所有制との合流(資本主義、民族抑圧、前資本主義の最悪の部分の合流)としてあることへの批判と闘争へと発展してゆくことが問われていったわけである。

そして多国籍企業・開発独裁政権への批判と闘争を、同時にこれにとつてかわつてゆくものとしての戦線の構築としてたまたかいたることが現在課題となつていくわけである。

国際共産主義運動が帝国主義国で直面したように、第三世界においてもこのような資本主義の段階との闘争に直面しているわけである。(フィリピン共産党の分裂やポト派の困難はそのあらわれといえる。)

として課せられており、そこでのプロレタリア、農民と第三世界のプロレタリア、農民との立場の相違をふまえてこの国際連帯のうえに、PKO反対・反侵略戦争があるわけである。

### 現代帝国主義の不均等発展、市場再分割戦について

耐久消費財を中心とする産業構造、これを中心とした多国籍企業、それによる第三世界の再編成、あるいはフォード・テーラー・オートメーション・コンピュータにいたる労働様式・労働者分断支配構造、それに適合させるものとしての消費様式・労働力再生産様式と福祉国家、これへの被差別階層の編入、さらには世界市場支配のための農業の従属・といった構造は、帝国主義の世界体系としては戦後アメリカ帝国主義の一元支配体制を出発点としている。

そしてその不均等発展による再編成、さらに危機の下での再分割戦と勢力圏をめぐる闘争として進行している。この勢力圏をめぐる闘争は、

東欧・ソ連の分解による階級闘争・民族紛争地帯化による一層グローバルな形で進行しようとしている。

もちろんこの出発点としての戦後のアメリカの一元支配体制は、同時に国際的な帝国主義の侵略反革命同盟でもあり、安保・NATO・IMFや新植民地主義、ひいては各国の労働政策・「福祉」政策とも関連を有しているものとも考えることができる。

そして帝国主義の世界体系という場合には、経済機構と国際的政治機構が有機的な相互関係を作り出しているばかりでなく、それら全体が不均等発展と再分割戦の構成要素であるということをも意味している。

それは1970年または1980年以降のドイツ(EC)ならびに日本帝国主義を先導とする不均等発展・再分割戦—帝国主義世界の再編成の独自の反動的性格をもしめすものとも考えることができる。

そこにおいてME・コンピュータ・日本の経営、日本の福祉、従属的資本主義化・開発・NICCS化、東欧の分断併合、排外主義(ナチズム、外国人労働者排撃)といった反動的エネルギーを帝国主義世界に刻印・普及させつつ戦勝帝国主義国なみ(アメリカ

あるいは英仏)軍事的覇権をめぐりての憲法改正・PKOまたはNATO域外派遣・国連常任理事国入りが目指されているわけである。

### 不均等発展とアジアNICCS

#### アジアNICCS

この多国籍企業はIMFとともに帝国主義の侵略反革命同盟の基礎であるが、戦後独立した新植民地群支配の経済的基礎ともなり、共産主義への防波堤としてのかいらい政権、大土地所有や買弁資本、とともに三位一体のものとして労働者農民に対峙し、(一九六〇年代中南米、アジア等)、大戦間流布した「輸入代替工業化路線」(注)をも破産させ、長期にわたる停滞を維持した。

注：軽工業輸入を国内生産にきりかえることから工業化をはじめるといふ路線。これの挫折が従属派の登場をもたらした。この次元でいえば韓国、台湾等NICCSは輸出(重)工業への特化からはじめた。

そこでの多国籍企業は、技術独占を特長とし、対先進国市場の比重を増大させたことは周知の通りである。レーニンが当時の資本輸出の特長として原料が強調されたのにたいし、技術独占、販路、安価な労働力追求の比重を増大させ、国内市場にたいして過剰化した資本は、一九六〇年

代以降アメリカから流出しつづけた(一九七〇年代はヨーロッパが、一九八〇年代は日本が中心の資本輸出地となつた)。

この多国籍企業はIMFとともに帝国主義の侵略反革命同盟の基礎であるが、戦後独立した新植民地群支配の経済的基礎ともなり、共産主義への防波堤としてのかいらい政権、大土地所有や買弁資本、とともに三位一体のものとして労働者農民に対峙し、(一九六〇年代中南米、アジア等)、大戦間流布した「輸入代替工業化路線」(注)をも破産させ、長期にわたる停滞を維持した。

注：軽工業輸入を国内生産にきりかえることから工業化をはじめるといふ路線。これの挫折が従属派の登場をもたらした。この次元でいえば韓国、台湾等NICCSは輸出(重)工業への特化からはじめた。

この多国籍企業は安価な労働力を求めて製造業の国際的の下請け化を広げはじめたが、それは、七〇年代以降日本帝国主義が資本輸出を大規模に開始することによって加速した。それはアメリカ市場とともに、日本の国家主導資本主義化路線や、工業用原料・部

品供給の国際的の下請け化を広げはじめたが、それは、七〇年代以降日本帝国主義が資本輸出を大規模に開始することによって加速した。それはアメリカ市場とともに、日本の国家主導資本主義化路線や、工業用原料・部



品の提供といった日本資本の深い介入によって急速に拡大したのである。かくして日本帝国主义の不均等発展は、その第三世界の従属的資本主義化、開発独裁、分化、国際的相対的過剰人口化、モノカルチユア、森林破壊等を決定的に押し進めた。

それはまたマレーシア等日本を中心としたアジアブロック推進派をもうみだしたのである。

他方では東欧分断・併合の先頭にたっているのが統一ドイツである。東独併合はもちろんユーゴ分断を促進したのがドイツ帝国主义であり、それらはEC通貨統合をほぼ不可能視させた直接の原因(財政負担増大による高金利と英・イタリアのEMS離脱)となったのである。

このようにしてNAFTA(カナダ・米・メキシコ)、EC・モノカルチユア最貧国アフリカ、太平洋(APEC)またはアジア・日本、ドイツ・ECならびに東欧、等第三世界の分化和ゆるやかなブロック化やその再編の底流を形成しているのが帝国主義の不均等発展であり、独・日のそれであることがわかる。とはいえ日・独にせよフリーハンドを失うようなブロックはのぞまない(独の対ECなら

びにソ連・東欧圏勢力圏化の野望等)のであって、このよくな米・日・ドイツ帝国主義の勢力圏再編成が最大の階級闘争地帯、民族紛争地帯へととむかっているということこそ重大なポイントがあるわけである。

### フードシステム

### 再編と「日本的経営」

この不均等発展の問題はテラー・フード・オートメーションシステムとその再編成において日本帝国主义がはたしてきたやくわりの問題へと発展する。

テラー・フード・オートメーションの中心は「大量生産・大量消費」における労働様式、そこにおける管理・労働者支配の様式である。

そこで労働者から独立し、これを支配する科学・技術・生産手段体系の主導権化と管理体系ならびに、労働の単純化と階層分解(科学技術・半熟練オペレーター・単純)さらさら下層労働者群の排出と相互の競争(それは三次産業

化によって加速する)は、巨大資本の専制力をつよめ労働者階級を統制してゆく。それは労働者階級にたえがたい苦痛をもたらした反抗やサボタージュをも不可避とする。(アメリカ労働者の欠勤率増大はその典型とされた)。

だから日本帝国主义のこのテラー・フード・オートメ・コンピュータの導入と労働者支配は、同時に戦後革命階級の影響力(職場支配、職場闘争)との闘争であり、それは一九五〇年代後半の自動車・鉄鋼労働運動敗北にはじまり、六〇年代炭労・造船重機・化学と続き、一九八〇年代末「国鉄解体」までつづいた歴史でもあったのだ。

それは敗北した労働者階級への逆の組織化(「参加」としてのQC運動をME化への適合化にむけて組織し、さらに重層的労働者差別支配構造を徹底化することをとうして遂行したのであり、大資本とりわけ世界市場分割戦の核心的な巨大資本本工労働運動の育成として推進したのであり、七〇末・八〇年代にかけて席巻したのである。

いずれにせよそれはフード・オートメのコンピュータ・MEによる再編という時代、省力と再分割戦の激化の時代

の生産効率化と労働者支配のチャンピオンとして世界的流れを形成し、その長時間労働ともあわせ、日本の経営はアジアNICIS化とともに不均等発展と再分割戦の武器とされてきたのである。

それはQC発祥の地たるアメリカにも逆波及し工場の国外移転(メキシコ)と一体化して労働者階級におそいかかり、ドイツの独特の労使協調体制(「共同決定」。しかし社民にすら媒介されない日本型労使協調とはことなる)下においても「労働時間再延長論」が公然とさげられるにいたっているわけである。

### 不均等発展・再分割戦における「日本型福祉」

### 「農業」

### 「破壊」

### 「本型福祉」

### 「農業」

### 「破壊」

### 「本型福祉」

### 「農業」

さらに戦後革命運動と労働者運動への分断策とセットに普及したものであり、なによりも生産過程における資本の支配・秩序・選別・差別・価値判断・労働力の吸排出・効率性の確保にむけての労働力再生産を意図したものであり、教育、家族、地域、「福祉」といったことをその領域とするわけである。

だから「福祉」国家の本質はバクローは戦後の反差別運動、アメリカ黒人運動や部落解放運動(そのしるしめ石論や差別の行政的温存批判)によっておこなわれてきた。がテラー・フードすなわち資本主義の生産過程との関連においてより明かにしていったのは七〇年代以降の「障害者」解放運動や女性解放運動からの、分離収容(別学教育や家族制度批判)であり、さらにはその日本型福祉批判(自助努力、家族依存)であり、外国人労働者排除、戦後補償問題であった。

先日(九三・一二)国連ですら統合教育原則による別学批判が決議されたように、それらは国際的に最悪の部類に属するとしても、危機の時代以降のサッチャー・レーガン来の「福祉切り捨て」や外国人労働者差別の歴史的潮流のなかにあつて、最も系統的な

それでも農村・農業の解体犠牲のうえに(さらに労働者の長時間労働や差別のうえに)、世界市場支配をめざし、世界の食糧を吸収し、自然を破壊してゆくその最先端に日本帝国主义が存在していることにはかわりがない。

差別支配・生産効率・選別、多国籍大資本秩序(その本工と下層・外国人分断にいたる)の温存・防衛機構でもあるわけである。

他方この戦後の蓄積は、「大量生産・大量消費」を労働者にも波及させ、それは農業の工業への従属、農業解体、世界の食糧不足をも結果せしめている。

食糧等自然の産物を供給するが自然条件に制約され、大規模化(剰余価値生産の困難なそれは、搾取の対象であり、開発・世界市場支配の犠牲の対象である)ともに、危機のクッション(疎開や不況・定年後の帰農)等資本の都合にまかされる。それは日本において成田、米自由化等鮮明であるが、米国においても輸出用モノカルチユア産業化(麦、とうもろこし、大豆)、農機具資本、穀物メジャーの収奪のもとで中・下層の破産が深刻化しているわけである。

それでも農村・農業の解体犠牲のうえに(さらに労働者の長時間労働や差別のうえに)、世界市場支配をめざし、世界の食糧を吸収し、自然を破壊してゆくその最先端に日本帝国主义が存在していることにはかわりがない。



# 不均等発展と排外主義

## 主義

戦後の侵略反革命、フォードシステムの出発点をなすアメリカ帝国主義の反共、排外主義は、対イラク戦争にみられるごとく依然として帝国主義の世界体系の支柱となっている。

しかしベトナム戦争の挫折と反戦闘争、黒人運動の高揚はアメリカ社会に大きな亀裂を作りだし、湾岸戦争においても黒人等の戦争否定は高率を示したのであり、砂漠の短期決戦によってかろうじてすくわれたのであった。

これにたいし外国人労働者排撃、ネオナチ、憲法改正のドイツ、日本におけるPKO支持、国際貢献論、連合とりわけ多国籍企業下労働組合の「社民」をもへないブルジョワジーとの直結は、排外主義への新しいエネルギーを有し、旧東独・東欧・ソ連、アジア

・中国の分解・階級闘争の動向とも関連し、その不均等発展と再分割戦を規定してゆくものとして注目しなくてはならない。

このように日本の排外主義においても「連合」の比重の大きさ（右翼をみかすませる）を考へるなら、不況の進展→日本の経営の危機によるその分解は、右翼等による排外主義への新しい再編の可能性をもふくんでいるわけである。

## 世界市場分割戦と

### 軍事

世界の労働者農民を抑圧し、第三世界を従属させる帝国主義の世界体系の基本骨格そのものは一九〇〇〜二〇〇〇初頭において形成され、一七年革命によってロシアが離脱したもののそれは再編成されてきた。

その間英・独対立といった枠組みは米中心に移行し、経済的にはドル体制・多国籍企業・フォードシステム、政治的には対ソ連・第三世界・革命運動といったアメリカの軍事力中心の帝国主義同盟が形成された。

世界資本主義はその後フォードシステムの導入・改良（ME等）、多国籍企業の普及と不均等発展・相互乗り入れ、EC・NAFTA等のブ

ロック、諸労働様式・労働対策（日本の経営、長時間労働）、第三世界再編・開発独裁と多国籍企業の結合をとうして不均等発展し、経済的なアメリカ中心体制をほぼ空洞化させた。

圧倒的軍事力をのぞけば、そのアメリカ支配は生産力の優位はたもたれているとはいえドル通貨体制によるドルのたれながしによる自国市場の開放以上のものと見ることはできないだろう。すなわちその双子または三つ児の赤字（貿易、財政、並びに消費者信用）による他国への市場開放力を武器とした統制力という問題である。（「制裁」等）

それは日本にたいしてもそうであるし、とりわけアジアNICS化にとって決定的であった。

しかしながらNICSの域内（アジア）貿易と対米輸出の比重は九十年をさかいに逆転したし（八六↓九一にむけて域内三二・四%↓四二・三% 対三七・二%↓二四・二% 日本のアジア輸出も対米より大きい）、日本も対米輸出資本の生産力化にともないその比重を低下してゆくとか

んがえられる。という意味ではこれらアメリカにのこされた最後のカードもむしろしっこ

くと化すと考えられ、NAFTA（北米自由貿易協定）米・カナダ・メキシコ）ブロック、さらにはAPEC（アジア太平洋経済協力）に力点をあかねばならなくなったのである。

それはちよとソ連・東欧支配体制の崩壊と軌を一にし、かつまた日独を中心とした未曾有の不況と軌を一にしているのである。しかもそれはパブル不況→五五兆もの不良債権と金融恐慌の危機、東独併合による財政破綻といった重い鉛のみこんでいるのである。GNP低下、九二年来の設備投資減と続く日本、ドイツのそれは典型的な過剰生産、とりわけ自動車・電機等耐久消費財過剰蓄積にもとづくものであり、労働者・農民・住民をかううじてつないできた幻想をも断ち、希望のない世界資本主義の道筋をさし示している。しかも戦後五〇年にもおよぶ不均等発展と過剰蓄積の結果としての市場再分割戦の激化の時代であり、その下での軍事的再編、軍事的国際貢献、日独PKO憲法改正、日帝の国連常任理事国入りといった問題であるわけだ。

、そしてその軍事力は第三世界民衆にむけてのみならず、東欧・ソ連の第三世界化・分

断をも射呈としているわけである。

そして日帝多国籍企業の推進するドラスタチックな開発、自国労働支配・農村解体・差別→日本型福祉、と軍事的膨張→貢献との結合の反動的性格を見抜き、大規模な労働者・農民・住民の闘争の不可避性を見抜き、その国際的連帯のうえにかれらを葬りさる機会の到来を準備することが問われているわけである。

## ソ連・東欧階級闘争の最前線

ソ連・東欧スターリン体制の崩壊は、われわれが引き続き一九二〇年代初頭のドイツ革命の挫折とともにソ連共産党の過渡期建設の挫折という課題をひきうけてゆかねばならないということをしめしている。

この時代の論争と実践的課題は、形をかえてではあれ今日にいたっている。すなわち中国の文革から民主化運動への発展とトウ小平体制の矛盾、ユーゴ労働者評議会と今日の分極化、ポーランド連帯運動と今日の「連帯、八〇」と反

「連帯」OPZZ（旧官製労働組）の統一戦線と大衆ストライキ、ロシア「改革派」の敗北、といった問題と密接な関係にあるといえる。

それは機械制大工業下資本の支配の下にあった労働者階級が、単に搾取・抑圧されてくるのみならず、資本の運動法則の下にあつて（強制ならびに組織化）細分化された労働を強いられ、かつ国家権力に資本主義の矛盾の公的意識的（資本家的）解決機構を独占されてきた存在から、これと実践的理論的に闘うことをとうして、いかに社会を統治しうる階級へと転化するか、という問題である。

つまり権力奪取は政治権力にたいするプロレタリアートの実践的理論的闘争と、生産過程・労働力再生産過程・地域での理論的実践的闘争のこのへの回路化をとうして、次ぎの社会の原理を内在化した階級的戦線を原則的には前提する。が階級と国家の死滅、差別の死滅、固定化された分業の止揚のためにはプロレタリア民主主義の原則と経験が必要である。「国家と革命」でレーニンが掲げた全成員の順番の統治への計画や、それの環としてのコミュニケーション型国家の四原則（全人民の武装、官吏のリコール、労働者

なみ賃金。決議（執行機関化）や差別克服や諸結社・諸組合・自主管理全国管理、あるいはそれを可能とする成員の文化的経験の平等化の計画という問題をふくんでいる。

注：文化・生産様式の精神的再生産・総括（多面的契機をもった個人の角度からのそれをふくむ）、すなわち労働からの解放、労働過程からの機能分化（諸科学・芸術・政治・教育、労働過程への価値判断・適合・慣習といった領域をふくんでいる）。

### ロシア・中国・ユーゴ・ポーランド

#### 労働組合論争と結果としてゆく労働者の統治・管理をめぐる諸論争、党内闘争の壁（一九二〇～二二）とロシア革命の未達成課題にたいし、ドイツ革命挫折による世界革命の後退気運を背景としつつ、これを反動的に固定するものとしてスターリン派は登場した。

それは一分派のイデオロギー・武装力独占と労働過程管理の独占とを結合し、これを農民・諸民族にたいしおしひろ

げてゆき、三〇年代超重工業化・農業集団化・トロツキ

追放とプーリン裁判をとうして確立してゆくわけだ。

だから二一年前後の未完の過渡期建設をめぐる論争と実践は部分的なもので、すな

わちユーゴの自主管理、中国文革と民主化運動（一九七〇年代末）、ポーランド労働運

動、ロシア階級闘争のはじまり（ペレストロイカ）とモスクワ人民戦線等の試みが登場したにである。（それぞれの

評価は諸文書参照）

現在のソ連解体に直結したペレストロイカは、ポーランド労働運動、ハンガリー市場

原理の直接的影響をうけたたものでありかつ、一九七〇年代帝国主義諸国にたいして

コンピュータ等ハイテク技術と消費財産業の立ち遅れを自覚した軍産官僚の自壊と一体とな

った党官僚の自己崩壊ともいうべきものであり、それ自身

のなかに新しいプロレタリアートの統一、復権、統治し

うる階級への道があったわけではなく、「結社の自由」に

象徴されるように階級闘争のはじまりともいうべきものであった。

その第一幕はIMFの要求下での価格自由化を突破口とした資本主義化プランの経済

破局化による挫折であった。

このことをとうしてプロレタリア人民は一方では資本主義とはなにかを、他方では社会を統治しようとはどういう

ことかを経験し成長するのである。

すなわち一連の民族主義政党（ポーランドキリスト教国民党等）はECとの連合協定

または恫喝を拒否し、あるいは外国資本流入への障壁（ECは東欧製品にたいし関税障

壁をもうけている）を要求している。また最近衝撃をあ

えたポーランド「連帯 80」と旧官製労働OPZZの統一

政策（現行民営化法の廃棄、国内市場の保護、企業負債の

帳消し要求）や大衆ストライキ（将来性ある国営企業の保

護要求等）、あいつく政権の敗北は、IMFの資本主義化

第三世界化プランの本質を自覚しつつある運動のひろがり

をしめしている。

そしてこれら大衆運動、労働運動こそがプロレタリアの

成長の契機であり、屈折しながらもこれらが東欧・ソ連階

級闘争の最前線であることをしめしている。

その観点からペレストロイカのなかからの運動（モスクワ人民戦線、カガルリツキ

ワ人民戦線、エリツイン派等労働者党や、エリツイン派

の支柱であった炭鉱労働者の離反等のなかに、ソ連の底流

における進歩的要素を見ておかねばならない。

それゆえ、年金生活者の支持があったとはいえ、社会主義の新しい原理と運動をつ

く、民主ロシア内闘争に旧勢力をひきいれること以上で

はなかつたルツコイの敗北は偶然ではないわけである。

それは同時に人民公社解体後、その導入外国資本（大半

は香港・台湾等華僑資本）を中心とした沿海特別区と、郷

鎮企業（旧人民公社の公営または村営企業）を中心とし

た急速な工業化にもつらなる問題である。

そこでは発展格差・所得格差をうみだしたのみならず、

階級・階層分化（たとえば社

区構成員は郷鎮企業の所有者となつたり雇用者となつたり

している）が進行しているわけだが、これを契機として発

展されるべき大衆的民主化運動・労働運動の発展がおしと

どめられているということである。この発展のみが、べつ

のかたちではあれソ連・東欧型分極化・階級対立が不可避

な中国社会のもとで、統一・統治主体化を可能とするわけ

である。（文革・民主化運動の経験のある中国人民にはそ

れが可能とかがえられる。それは自主管理の経験をもつ

ユーゴ人民が、その経験の総括をとうして民族対立を止揚

するであろうのとおなじである）

ブンドと新左翼

ブンドの統一の問題は、たんにブンドの問題ではなく新

左翼党と不可分の問題である。とはいえブンドにおいてすら

その分裂を総括できないとしたら前提条件にすらたつしな

いであろう。

もちろん七〇年の分裂（六〇年のそれをふくめて）には

いかなるいみでも正当性はみい出されない。

しかし党が求心力とともに遠心力をもつねにもつとすれ

ば、われわれはこの問題を運動、理論、領域における相違

において、問題設定を共有と

いうことを考えなくてはならない。

それはとりあえず、路線なりイデオロギーなりと運動・

実践・諸自然発生性との関係を前提している。それは資本

主義・帝国主義批判と運動・実践との関係でもある。ひい

ては反帝国主義、反戦と、これへの諸運動の回路という問

題ともむすびついている

すなわちすべてのイデオロギーなり、路線なりは生産様

式あるいはその国家との関係から直接規定される諸自然発

生性・運動の目的意識性への転化との関連において存在する

ということなのだ。

という意味で、資本主義批判なり帝国主義批判なりは、

たんに客観的運動（法則）としてあるのではなく、直接的

運動なり意識諸形態、あるいは生産様式批判なり国家批判

なりの諸契機、現実の諸イデオロギーとその対立への源泉

と回路との分析のためのものであることがわかる。

そこに今日の二つの傾向・多かれすくなかれ経哲草稿

の部分的理解にもとづく観念論型主体性派と、生産・労働

力再生産の現場の諸断片を直接結合しようとする共労党型

オルタナティブといった傾向の系譜との論戦可能性の道筋

も開かれるわけである。

（主体性派型観念論の場合には、マルクスが未分化ながら、

「類からの疎外」において想念した分業、貨幣、流通・総

過程、上部構造、意識諸形態、さらには国家

の連関を展開せず、また相対的剰余生産と相対的過剰人

口へと発展しうる「労働」過程からの疎外」をも捨象す

ることによって、イデオロギー・国家と経済的土台との関

連は見失われる。オルタナテ

# スローガン

イブは、おなじような捨象によつてより具体的現場—自主管理や生産組合や労働のありかた・創造的労働や生産第一主義批判やらを、資本主義批判なり国家批判・コミュニケーションなり目的意識性ぬきに直接結合してしまふのである。

しかし七〇年以降の運動の発展は、広範な共通のイデオロギー的路線の基盤をもわれわれに提供しているのである。

官公労から民間へ、さらに下層へと発展し、本工主義批判、平等と職場決定権、争議・自主管理、少数派組合、U N I O N、外国人労働者等へと発展した新左翼労働運動と総体としての帝国主義労働運動への再編もそのひとつである。

帝国主義の危機、不均等発展、再分割戦と侵略反革命の再編成と日本帝国主義の「国際貢献」、これへの国会前、街頭、草の根からの、ならびに以上の諸運動のネットワークを基盤としての反戦・反帝闘争。

(国際的には中国、ポーランド、ユーゴ、ソ連の経験が社会主義をめぐる抽象論議に終止符をうった)

そして一方では侵略帝国主義とその権力との戦線、他方では生産過程、労働力再生産過程での各階級・階層の直接的運動、これらを発展し、その主張を理解し、統一してゆくという問題を階級闘争の一級の課題とするにいたつたのである。(これが内ゲバの反動的性格をうきぼりにした)。

I 史上三度目の分割戦—新植民地主義的侵略戦争と、戦後型集積下階級支配の危機の相乗的展開を世界同時革命へ

II 国連・多国籍軍の帝国主義による再分割、集団植民地主義機構化粉砕

・アメ帝中心の多国籍軍、新世界秩序粉砕

・日帝P K O、独憲法改正によるアジア、東欧、世界再制覇の野望を粉砕せよ

・P K O粉砕、「国連軍」解体、U N T A C解体

III 第三世界労働人民による反帝、反開発独裁、民族解放闘争支持

・民族自決権支持

とのたたかい支持

IV 戦後の生産力(集積)—通称フォードシステムを基礎とした階級支配の帝国主義的再粉砕編

(注 生産力：生産手段—労働様式、消費—労働力再生産様式、産業構造)

・P K O、自衛隊派兵粉砕、改憲策謀粉砕

・保守二党体制粉砕、巨大資本—連合の共同支配体制解体

・階層分裂をふくんでの労働者への巨大資本による管理支配の完成解体

・資本の生産過程—国家への従属をめざす労働力再生産過程の帝国主義的再編解体

V 労働者、農民、被差別階層、地域住民の統一と反侵略・反植民地主義・反戦・反帝統一戦線の下への結合を闘いとう

VI 世界史上三度目の分割戦を共産主義運動の第三の波として闘いとり、世界プロレタリア社会主義革命の勝利へ

・多国籍企業化のもとでの再分割戦・ブロック化と帝国主義侵略反革命同盟の複合的再編を自国政府の敗北、プロレタリア国際主義、被抑圧民族との団結でうち破ろう

・労働者農民の従属の結果としての過剰蓄積—反人民的産業構造(大量生産大量消費)を国際主義・プロレタリア民

・農業の工業への従属、多

・金融的外交的軍事的従属

VII マルクス主義、レーニン主義の未達成課題を共産主義運動の第三の時代に勝利しよう

・1920年前後のロシア革命の未達成課題をひきうけよう

・中国・ユーゴ・ポーランド等の経験の批判と継承のなかから次ぎの社会主義を

・東欧・ロシアの資本主義化—第三世界化策謀粉砕、スターリン主義再編・テクノクライト支配との闘い支持

・プロレタリアートの統治しうる階級への転化のすべての試みの支持

・プロレタリア民主主義、全成員の統治しうる階級化、分業の固定化の止揚、自主管理—全国管理、労働組織への計画と労働運動・社会運動との結合、国家・階級・差別の死滅へのすべてのこのころみの支持

・全ての先住民族の闘いと

の連帯の中から共産主義運動の発展を

あるいは部落差別と石、中央集権国家批判、につづいた障害者解放運動や女性解放運動からの資本と機械制大工業下での労働過程・労働力再生産過程ならびに福祉国家批判。

あるいは侵略と一体化した開発、工業への農業の従属にたいする戦闘的農民・農村の登場。

さらには第三世界の多国籍企業による開発と労働者、農民、原住民、都市スラムの運動。

たは統一してゆという方法を党、分派、個人に強要しているものとみななければならぬのである。(旭凡太郎)

決/世界革命の一環としての反帝・反封建・反開発闘争支持

・反多国籍企業、反開発、反モノカルチユア、反国際的



書籍紹介

# 「地域主権の時代」

シンポジウム

今こそ、市民自治 地方主権の政治を地域政策フォーラム編 発行 金羊社

従来中央集権国家に抵抗す

るものとしてある意味では大衆、人民の側から、あるいは運動の視点で一定「権力論」

・「社会運動論」として、オルタナティブ論なり、地方・

地域論が開示されてきたのに

対して、この『地域主権の時

代』は、そうではなく、今日

の、政治改革なり、行政的、

政策的視点から論述されてい

るのが特徴である。

勿論、運動論的視点がない

わけではない、「市民が政治

(国家・権力・行政：筆者)

の主人公」、「市民のアイデ

ンティティーの再興、あるいは

「獲得」といったことが述べ

られている。しかし、その目

指す政治は、カッソでくっ

たあるがままの政治、それは

さし当って議会ということ、

または、自治体行政を意味し

ている他ではないのである。

したがって、結論を先きに述

べれば『地域主権の時代』は

その主張しているところによ

れば、地域連合の国家連邦

制ということになる。「市民

が政治の主人公」という場も

立法府としての議会への参加

である。

以上のようなトーンでこの

本は貫かれているのである。

私は、わが田に水を引くよ

うではあるが、例えば、三

塚山農民の、この数年のた

たかいに、「地域主権」をの

べるなら十分学ぶべきである

ことを訴えるものである。

三里塚山農民は、この二

八年間政府のポタンの掛違

に対する抵抗闘争としてた

ってきた。ここでは極めて民

主主義(民主主義とは単に議

会とその多数決にあるのでは

ない。むしろ少数者の権利と

してある)的な要求としてあ

った。この民主主義的要求を

踏みにつけて、問答無用の機

動隊政治を常態化させたもの

こそ政府・公団であった。こ

こに流血の二五年間が生じた

のである。

ところで、三里塚山農民

は、この三年間、反対のため

の反対でも、物取的要求でも

なく、極めて原則的に闘争の

場を移してきたにすぎない。

その中で、自らの地域を奪

返し、自らの農村社会のみな

らず自然環境を含めた地域諸

住民との共生を取りもどそう

としている。ここに、先きの

A、土地取用申請取り下げと

B、B・C滑走路(二期工事)

の全面白紙をかちとったので

ある。もし、『地域主権の時

代』のように、現場でのたた

かいを拾象して、しかも議会

に事を委ねるようなことであ

ったなら、決して、二期工事

の完全白紙は獲ちとれなかつ

たであろう。

さて、三里塚闘争に照して

も単純に、国家と地域を平板

に二項対立的のべてみても

不十分でなからうか。要は、

政治闘争にまで行きつくとい

ろのたたかいを市民が、地域

住民が、地方がのぼりつめな

ければならず、その中味とし

ての市民のアイデンティティ

なり、主人公としての自覚

がめばいるのではなからうか。

そこではじめて、コミュニ

的団結、ソビエト的団結が国家

に変わって生れるのであり、そ

こではじめて政治が語れるの

ではないか。

たたかいないところに政

治は語れないのではないか。

たとえ語ったとしても空虚で

ある。ともあれ、今日の政

治改革論議が政界再編として

進行している事態に対して、

この「地域主権の時代」は、

一つのアンチを示しているこ

とは確である。

関東ウタリ会は、この数年

春さきに「アイヌ民族文化と

人権の集い」を主催してきた。

昨年は、三月二十八日、早

稲田大学において「アイヌ民

族と教科書」をテーマとして、

シンポジウムを開催した。そ

の報告集、「もう一つの教科

書問題」を資料多数を含めて

約百頁の小冊子として昨年暮

に刊行した。

シンポジストには、

アイ

ヌ民

族に

それ

それ

の分

野で

深く

関わ

って

きた

大学

教授

と小

・中

・高校教諭が報告した。また、

関東ウタリ会からは、北原

よ子、知里むつみ氏がそれぞ

れ所見を述べた。さらに、ペ

ウレウタリの会の、牛の浜裕

氏は、小・中・高で使用され

る教科書の実態調査の報告を

した。

日本の社会科教育なり、歴

史教育のあり方は、一方的な

略と抑圧を是とするナシヨナ

リズムを喚起するものとなっ

てきた。その象徴的標語こそ

が「単一民族国家」観であり、

明治以降の「万世一系」史観

であった。

しかし、この二十数年来の

比較言語学の分野で、文化人

類学という新しい学問の世界

で、さらに、民主主義の根幹

たる人権の分野で異文化の対

等性(あるいは共生)や少数

者の権利擁護の運動が全世界

的規模で展開されてきた。い

わゆる民族理論においても、

かつての四つの規定なる固定

的静体的な概念規定から文化

を中心とする流動的なものへ

と変わってきている。しかも、

直接的には、差別・被差別の

うちに形式されるアイデンテ

ィティーとしてのナシヨナリ

ズムである。ソ連邦と東欧圏

と中央アジアにおける「社会

主義」の崩落は、こうしたよ

り直接的な形でのナシヨナリ

ズムの拾頭をみることででき

る。克服されるべきナシヨナ

リズムが何故に、今、勃興し

てきているのか?

その重大なトピラを解くカ

ギこそこの小冊子である。

この小冊子は朝日新聞でも

大きく報道された。

編集・発行 関東ウタリ会

## アイヌ民族と教科書

—もう一つの教科書問題—

アイヌ民族にそれそれの静的な概念規定から文化を中心とする流動的なものへと変わってきている。しかも、直接的には、差別・被差別のうちに形式されるアイデンティティーとしてのナシヨナリズムである。ソ連邦と東欧圏と中央アジアにおける「社会主義」の崩落は、こうしたより直接的な形でのナシヨナリズムの拾頭をみることでできる。克服されるべきナシヨナリズムが何故に、今、勃興してきているのか? その重大なトピラを解くカギこそこの小冊子である。この小冊子は朝日新聞でも大きく報道された。

編集・発行 関東ウタリ会

私は、書評を書くほど熟読吟味したわけではない。ただ、時代にマッチしたテーマであり、かつ大胆な提言を幾つかしているという点で一読に値するであろうと紹介するのみである。

私に、書評を書くほど熟読吟味したわけではない。ただ、時代にマッチしたテーマであり、かつ大胆な提言を幾つかしているという点で一読に値するであろうと紹介するのみである。

私に、書評を書くほど熟読吟味したわけではない。ただ、時代にマッチしたテーマであり、かつ大胆な提言を幾つかしているという点で一読に値するであろうと紹介するのみである。

私に、書評を書くほど熟読吟味したわけではない。ただ、時代にマッチしたテーマであり、かつ大胆な提言を幾つかしているという点で一読に値するであろうと紹介するのみである。